

上勝の伝統家屋

上勝の山中に古くからある家屋は、伝統的な特徴を残しつつ、時代のニーズと共に進化してきました。急傾斜地であるということは、土地の区画が山の等高線に一致していなければならないということを意味し、そのためたいへん長く、浅い形状をしています。これらの区画に建つ建物、主屋や納屋などは、決まって一列に並んでいます。

1685年に建てられた八重地の田中家住宅は、この地域の初期の伝統家屋を代表するものです。この家は、現在はトタン屋根に葺き替えられていますが、当初は茅葺きの寄棟屋根を持っていました。間取りは十七世紀後半の一般的な農家のものです。その間取りとは、固められた土の床の、料理をするのに使われた部屋（ドマ）が一つと、板張りの揚げ床上の部屋が三つ、すなわち、表側の部屋、イロリがある中央の部屋、そして寝室、というものです。このような家では、日常的に使うカマドやイロリの煙が害虫を追い払い、茅葺き屋根の耐久性を高めました。

比較的新しい家屋は二階建てになっています。時が経つにつれ、茅葺き屋根は金属製のものに葺き替えられ、子供部屋などの小さな部屋が追加されました。

田中家住宅は現存する徳島県で三番目に古い家屋で、1976年に重要文化財に指定されました。田中家住宅は外側からしか見ることはできませんが、花野邸は一般公開されており、伝統家屋の屋敷構えを体感することができます。

構造：クリ材、マツ材、スギ材、サイプレス材

屋根：ススキ、杉皮

壁：泥、杉板、杉皮